Japan Society for Southeast Asian History

ホイアン・シンポジウムと ベトナム史研究の“ドイモイ”

桃木　至朗

80年代中頃から始まったベトナム社会の“ドイモイ”（刷新）の中で，歴史学を含む社会科学各分野も大きな変化をとげてきた。本年３月に中部ベトナムのダナン市で行なわれた「古都市ホイアンに関する国際シンポジウム」も，様々な点でその変化を象徴するものだった。

シンポが計画・組織された過程，日本側各界の協力体制などについては，当時の各新聞，テレビでも報道されたが，ベトナムで最初の人文・社会科学分野での純学術的国際シンポジウムとして，ベトナム側では国家レベルの事業として取り組まれたものであった。

シンポには，日本ベトナム研究者会議（87年設立）が中心となって組織された石沢良昭団長代行以下14名の日本代表団（山本達郎団長は健康上の理由で不参加）のほか，オランダ，カナダ，タイなど，総勢20名ほどの外国からの研究者と，そして50名以上のベトナムの第一線研究者が参加した。筆者も事務局の一員として日本代表団に加わった。３月22，23の両日にシンポ本体が行なわれたほか，21日にホイアン市を見学，また日本代表団としてはシンポ前にハノイで，シンポ後にはフエ，ニャチャン，ホーチミン市などで遺跡，博物館，文書館等の見学や研究機関等との交流を行なった。

シンポのプログラムは以下のようなもので，単なる日本町の研究にとどまらない多様なテーマの報告が行なわれた。

〔３月22日午前：全体会〕 開幕の辞／ファン・フイ・レ「ホイアン―歴史と現況」／石沢良昭「ホイアンと日本人」／ノン・クオック・チャン「古都市ホイアンの価値と保護・修復，街の役割発揮の方向」／千原大五郎「茶屋新六の交趾国貿易渡海図に描かれた諸建築」／チャン・クオック・ヴオン「ホイアンの歴史地理的位置と文化地理的本領」／チュォン・ヴァン・ビン，J. Kleinen（蘭）「17－18世紀のオランダと阮氏との関係に関する VOC 資料」

〔３月22日午後～23日午前：分科会〕

第１分科会（考古・文化。座長：長谷部楽爾，チャン・クオック・ヴオン，ハー・ヴァン・タン）長谷部楽爾「陶磁貿易を通じて見た日越関係」／ヴー・ヴァン・ファイ，ダン・ヴァン・バオ「ホイアンと隣接地域の地勢の特徴」／P. Burns, R. M. Brown（タイ）「11世紀のチャムーフィリピン関係」／ホアン・ヴァン・ホアン，ラム・ミー・ズン「ホイアンの古銭とその歴史的発展の各段階」／青柳洋治「14－15世紀東南アジア島嶼部発掘のベトナム陶磁」／チャン・キー・フォン，ヴー・ヒウ・ミン「４－10世紀，チャンパ王国期のダイチエム河口」／ホー・スアン・ティン「ホイアンとクアンナムダナンの原史におけるカムハー甕棺遺跡の位置／グエン・ボイ・リエン他「ホイアン―クアンナム地方のゲーバウ船」／グエン・ドゥック・ミン，チャン・ヴァン・ニャン「ホイアンの水祭り」／ドアン・ティエン・トゥアット「ホイアン方言」／ホアン・ティ・チャウ「18世紀ホイアン―ダナンの混血言語」

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Southeast Asian History

第2分科会（歴史。座長：川本邦衛，L. Blusse，ファン・フイ・レー）川本邦衛「外蕃通書から見た広南阮氏の世界認識」／グエン・ディン・ダウ「商港ホイアンの形成と発展」／小倉貞男「交趾国貿易渡海図と滝見観音」／ヴー・ミン・ザン「ホイアンの日本人，日本町，日本の遺物」／加藤栄一「日本のオランダ商館のインドシナ貿易」／ドー・バン「ホイアンの国内交易の関係と様式」／生田滋「2－17世紀東南アジア海域における各港市の役割」／レー・ヴァン・ラン「ベトナム中世都市群の中のホイアン」／L. Blusse（蘭）「クアンナムと北部における VOC」／ファン・ダイ・ゾアン「ホイアンと中部」／グエン・ヴァン・ホアン「ホイアン，17世紀ベトナムの世界との文化交流の中心」／ズオン・チュン・クオック「古都市ホイアンとの関係の中でのダナン」／グエン・チー・チュン，チァン・アイン「タインチャウの燕巣採り」

第3分科会（建築と遺跡保存。座長：千原大五郎，ホアン・ダオ・キン，リウ・チャン・ティエウ）Kazimiel Kwiatkowski（ポーランド）「ホイアン旧市街の修復―保存プログラムに対するポーランドの経験」／チュー・クアン・チュー「美術から見たホイアン」／チン・カオ・トゥオン「建築の角度から見たホイアンの文化接触」／チュオン・タウ「来遠橋」／ダン・ヴァン・バイ，グエン・クオック・フン「古都市ホイアンの保存と利用に関する大きな方向」／ホアン・ダオ・キン，ヴー・ヒウ・ミン「ホイアン古建築の現況の分析と評価」／ホアン・ダオ・キン他「ホイアン旧市街の保存と利用に関する若干の提案」

〔3月23日午後：全体会〕各分科会からの報告／総合討論／討論まとめ／閉会の辞

このシンポの学術的意義としては(1)日本を含めた資本主義諸国と，しかも多数のベトナムを専門としない研究者との交流の実現，(2)ほとんど空白の分野であった中南部の前近代史を対象としたこと，(3)未開拓であった生態的条件，対外関係，遺跡保存などが主要テーマとして取り上げられたこと，の3点があげられる。主に社会主義国と交流し，生産関係と階級闘争，民族性と民族闘争などを主要課題としていたドイモイ以前の研究から欠落していた部分を埋める大きな意義を，それらが持っていることは言うまでもない。

実際に出て来た研究成果の最大のものは，日本町形成とベト人の進出以前，つまりプレ・サーフィンないしサーフィン前期と呼ばれる青銅器文化―サーフィン（後期）の鉄器文化―チャンパ文化の各段階におけるホイアン地域の地理，生態，考古学に関する研究成果である。小倉貞男氏の『朱印船時代の日本人』（中公新書，1988年）でも紹介されているそれらの問題に関するベトナム側研究者の報告は，外国人研究者たちを大いに興奮させた。中部ベトナムの基層文化と国家形成，南シナ海海域世界史などを考える上で興味究い材料が次々と提供された。

その他，大航海時代についても VOC 文書や現地の文献史料，出土陶磁器など重要な新資料が紹介されたこと，学術研究と並ぶ重要な問題である遺跡保存についても，街並み保存の観点からの課題が明確にされたこと，等々，シンポの成果は多方面にわたった。

以上のように，ホイアンの中部ベトナムの歴史が時間的にも空間的にも大きな広がり

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Southeast Asian History

を伴って総合的に検討されたことは高く評価すべきだが，あえて残された課題を探すと(1)日本・西欧との交流が組織上でも内容的にも重視されたのに対し，中国・東南アジア諸国との関係について言及が少なかったこと，(2)日本町と広南阮氏に関する研究は，新資料はあっても全体に興奮が薄かったこと，(3)対外関係が色々言及されても，それを通じて各時代の国際関係の構造，そこでベトナムが占めた位置などは明からにされなかったこと，などがあげられる。

ともあれ，中南部ベトナム史やベトナムを地域世界の中に位置づけることは，今後大いに進展の期待されるテーマであり，その第一歩としての本シンポが多方面の努力によって成功したことをよろこびたい。

地区例会・研究会活動状況

関東地区――鈴木恒之

関東例会では，東京女子大学文理学部に会場を借り，本年4月以降の月例会を下記の通りに開催しました。毎回，発表者が力作を披露し，若い研究者の方々も熱心に参加して下さっているが，以前に比べ参加者がいささか減り気味なのが残念に思われます。より多くの皆様の参加を期待しております。

1990年4月28日　西尾　寛治「ダウラト VS プルジャンジアン：マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察」

5月26日　高橋　ゆり「セイン・ティン（テイッパン・マウン・ワ）の思想と文学――1930年代のビルマと個人――」

7月14日　南家三津子「インドネシア新体制下における住民組織の強化政策」

9月29日　玉置　泰明「土地・開発・組織下――フィリピンにおける『歴史を作る主体』としての農民・少数民族――」

中部地区――槻木瑞生

二ヶ月に一度の割合で東南アジア研究を開いています。最近三回の研究会は次のようなテーマで開催されました。

第57回例会5月12日　1920～30年代のインドネシアの国際収支――植民地的流出とその政治的背景
報告者　名古屋市立大学　内藤能房氏

第58回例会7月21日　現代ジャワ農村における社会組織と累積構造
報告者　愛知学院大学　黒柳晴夫氏

第59回例会9月22日　19世紀末の宗務官吏
報告者　名古屋短期大学　小林寧子氏

この半年はどういうものか話題がインドネシアに集中してしまいました。そのためか，

NII-Electronic Library Service